

---

## 愛猫が人になっていた時の話。

---

—

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛猫が人になっていた時の話。

### 【Nコード】

N4213Z

### 【作者名】

—

### 【あらすじ】

俺はどこにでもいる普通の普通で普通すぎる学生。ペットの猫、「ミオ」は、ある日俺が目覚ますとなんと超絶美少女になっていた！猫だった頃の癖か、いろいろなことをしてしまうミオは、俺を「ご主人」と慕い、俺の普通の普通で普通すぎる生活は幕を閉じた！これは、その日々を書き綴った物語。

## 一日目（前書き）

初めての投稿となります。

普通、小説には『血の文』  
じゃなかった、無駄に血生臭くしてしまいました。

えっと、『地の文』というものがあります。この小説には、その『地の文』が一箇所ありません。会話文だけで成り立っています。ですので、状況を把握しにくいといったところがあります。

ただし、基本は主人公の家の話なので、特に気をつけて読む必要もないです。

## 目 次

「どうしてこうなった？」

「さあ……奇跡って、起るものにゃんですね、ご主人」

「確認させてくれ？」

「じゃんじゃりよ」

「えっと、お前は俺のペット、猫のミオなんだよな？」

「そうですじゃ」

「それで、今朝起きたら、いつの間にか人間の女の子になってたと」

「間違いじゃいですか？」

「……………まじっ？」

「まじですか？」

「嘘？」

「嘘でもじゃいですか？」

「いつもの俺なら夢かなにかと思つてころるだが……」

「だが？」

「キッチンがこの有様じゃ、夢とは思えないなあ……」遠い目

「うっ…朝食を作ろうと思ったんですけどにや…」

「どーやったらここまでなるのかわかんねえ程、すべてのフライパンを焦げ付かせてくれたな」

「じゃあ……」

「……ま、いいけどよ。俺のためにやってくれたんだろ？」

「じゃ……」

「気にすんなよ。な？」

「……ホントですか？」

「俺は嘘は嫌いなんだ」

「……ありがとう、ご主人」

「しかしだ、このままでは俺の今日の朝食はない。ついでに言っと、お前のもだ」

「？ キャットフード……」

「人間の姿なのに、キャットフードなんて食わなくていいだろ。つか、見た目的に悪すぎるわ」

「そうですかにゃ?」

「そうなんだよ。……とにかく、コンビニ行ってくるわ。なにか食べたいものは?」

「うん…にゃんでもいいです」

「そっか。じゃあ、適当に買ってくるわ」

「いってらっしゃい」

「ああ、そうだ」

「?にゃんですか?」

「……服、着とけな」

「にゃあ?」

~~~~~

「買ってきたぞ」

「おかえりにゃさーい」

「うわっ抱きつくなよ、もう猫じゃなくて普通の人間なんだからよ……パンとかおにぎりとか、色々買ってきた。好きなもん選んで食べる」

「にゃー どれにしようかにゃー」

「(滅茶苦茶機嫌よさそうだな)」

「それにしてもご主人」

「なんだ？」

「ご主人のその、臨機応変にや適応力には目を見張るものがあるにやあ」

「ん？どういう意味だ？」

「朝起きたらおんにやの子がいて、キッチンがボロボロにやってて、それで今一緒にそのおんにやの子のためにご飯を買ってきて、普通に接してることを言ってるのにや。普通、もっと混乱したりするもんじゃにやいのかにや？」もぐもぐ

「起きちまったことをグダグダ言っても仕方ねえしな、起きたことは気にしねえんだよ」もぐもぐ

「にやるほど…にやんだかにやっとくしちゃったにや…」もぐもぐ

「ところでミオ」

「にやにかにや？」

「確かに俺はちゃんとした服を着てくれと言った。だがな」

「？にやにかおかしいかにや？」

「俺のシャツを着るのはやめてくれ。しかもそれだけ着るとかマジやめてくれ」

「にやんで？」

「傍から見たら犯罪的な絵なんだよ！（美少女なだけにな！）」

「よくわかんやいけど…まあ、気にしちゃ負けだと思っにや」

「ねえよ。いいから今度こそちゃんとしたやつ着てくれ。俺の理性が持たなげふんげふんっ！！」

「大丈夫かにや？」

「と、とにかくだ。確か昔着てたジャージがあるからそれを着てくれ」

「は〜い」

数分後。

「お、ちゃんと着てきたな」

「動きやすくていい感じだにやん」

「それはなににより（まあ、一部運動しにくそうな部位がお前の身体についてるわけだが）」

「……………！」

「どうかしたか？」

「……れ」

「れ？」

「と、トイレ……」

「あ、ああ……場所は知ってるだろ？行ってこ　　っておおおおい  
いつっ！！？？やめる」ココで脱ぐな！個室に入ってから脱げ！」

「に、にゃあ……」

「だあああっ！！早くっ！」

数分後。

「ま、間に合ったにゃ……」

「間一髪だ……たく、猫のときみたいにその辺で、とか勘弁してく  
れよ？」

「わかったにゃ」

「さて、今度は何をしとかなきゃいけないか……そうだ、やっぱりお  
前の服だな。幸い、俺には趣味もないし、バイトしまくってたためた  
金が結構ある。こいつを使おう」

「え、でもこの服で十分ですよ。そんなお金を使わなくても」

「ダメだ。せつかく美少女で人間になつたんだ、オシャレもそれなりにしようじゃねえか。大体、金つてのは使うためにあるんだぜ？躊躇ってちゃ何もできねーよ」

「は、はあ…そーゆーもんですかにゃ？」

「そーゆーもんなの。じゃ、はい、チーズ！」パシヤッ

「にゃあっ！？にゃ、にゃんですかつ！？」

「写真だよ。これを見せて店の店員さんにお前に合いそうな服を見繕ってもらおう」

「にやるほど…（多分、にゃんでもよかったのに、なんていったら怒るんだろうにゃあ）」

「そんじゃ、行ってくるわ。留守番、よろしくな」

「にゃ。いつてらっしゅい」

二時間後

「ただいま〜」

「おかえりにゃさい……っ」と

「お、抱きつくの我慢したな。偉い偉い」ナデナデ

「にゃは〜」

「さて、ではでは、これらがお前の服だ!」ガサゴソドサッ

「じゃあ、結構多いじゃ」

「いやいや、まだまだ」ガサゴソドサッ

「すごい量だにゃ…:ていうか、よくもまあそんなに小さな紙袋に入ってるにゃ…:」

「まだあるぜ?」ガサゴソドサッ

「ご主人の紙袋はどこかのネコ型ロボットのポケットにゃみかにゃ!?!」

「おまえ、意外とアニメ見てたのな…:」

「個人的に、あのアニメは結構好きだにゃ」

「そっか…:まあ、予約しといてやるよ、そしたらいつでも見れるしな」

「にゃ〜」

「それはともかく、早速試着だ!」

「…えっと、これを全部着るのかにゃ?」

「当然」キラッ

「…ご主人?目が怖いにゃあよ?」

「気にするなって」

「気にするにゃ！」

「問答無用！先ずはこの服からだあーっ！！」

「にゃあああああっ！？」

数時間後

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ…」

「で、結局この服でいいのかにゃ？」

「チクシヨウ、さすが元ネコ科、疲れが見えねえ…」

「にゃはは〜」

「…ふう、まあ、それでいいだろ。なかなかいい感じだ。あの店員、いいセンスしてるな。どんな目してるか知らんが、サイズも全部ピッタリだったし」

「でもご主人、一つサイズが間違ってるやつがあったにゃあね」

「お前のそれは規定外だ」

「にゃ〜…胸が苦しいにゃ〜」

「（下着はどうにもならなかったよなあ…）」

「……………」

「?ミオ？」

「すー…すー…」

「…なんだ、寝ちまったのか。  
毛皮じゃねえんだから…」

風邪ひくぞ、猫のときみたく

「すー…すー…」

「起きる気配なし、と…しゃーねーな、ベッドまで運ぶか…よいし  
よっ…と」

「ん…にゃ……」

「ミオ、ね…不思議なこともあるもんだ。猫が人間に、なんてな…  
よっと」

「にゃ〜…………ご主人……………」

「…夕食には起こしに来るからな」

数時間後

「ご主人っ！ご主人！？」

「うわっ、急に大声出してどうした!?!…まあ、起こしに行く手間は省けたけど…で、どうした?」

「にゃ〜…ご主人がいなかったから、ちょっとビックリしたのにゃ〜…」

「何処も行かねえよ…ほら、夕飯だ。座れ」

「ご飯はにゃにかにゃ〜」

「見ろ！魚の味噌汁、焼き魚、お刺身、その他もろもろ魚料理がたくさん！」

「にゃあ〜」

「（やべえ、笑顔が可愛い）」

「こ、これっ、食べていいのかにゃ!?!」

「あ、ああ。好きなだけ食べよ」

「やったあ〜」

「（超ご機嫌そう）」

「あ」

「どした？」

「…お箸が持てないのにゃ…」

「…スプーンとフォーク用意するか」

数分後

「ごちそうさま〜 美味しかったにゃ〜」

「早え…食べるの超早え…」

「にゃは」

「…まあ、いいけどよ。っと、そつだ。風呂、びじりする〜」

「ご主人と一緒に」

「無理」

「にゃんで?」

「…なんでも」

「む〜……」

「ま、まあ、あれだ。一人で入れる練習だ」

「む〜…釈然としにゃいにゃ…」

「いいから、先入って来い」

「ご主人は?」

「俺はこの料理の後片付けだ」ドッサリ

「手伝　えにゃいにゃ…」

「まあ、追々、な？」

「…じゃあ、行ってくるにゃ」

「おう。着替えはちゃんと置いておくからな」

「は〜い」

数分後

「お、あがったか？どうだった、風呂はぶふうっ!？」

「あ、服着るの忘れたにゃ」

「早く着て来い！」

「は〜い」

数分後

「着れたにゃ」

「よし」

「でも、大分大きめにゃんだけど…」

「（あの店員、さては自分の趣味で選びやがったな）」

「ご主人？」

「…いや、なんでもない。俺、風呂入って来るわ。寝るならベッドでな」

「は〜い」

数分後

「なんか、疲れてたんだな俺…危うく風呂につかりながら汗かきすぎて脱水症状起こすところだった…風呂場で脱水症状って、シャレにしかなんねえ」

「あ、ご主人」

「なんだ、まだ起きてたのか？」

「一緒に寝るにや」

「無理」

「にやんで」

「なんでも」

「む〜…」

「一人で寝る練習だ」

「どんな練習にや…」

「ほら、子供が親ナシで眠れるように、押入れに閉じ込めて寝かせたりとかさ、そんな感じだよ」

「そんな恐ろしい教育方針してる家はにやいと思うにや」

「マジかよっ！？くっそ、親父、騙しやがったな！？」

「どんな生活をしてきたんだにや、ご主人」

「まあ、そんなわけで、一人で寝てくれ」

「いやいやいやいや、どこが『そんなにやわけ』『にやのかわかんにやいにや』」

「いろいろあるんだよ」

「今日だけでいいからにや」

「……本当だな？」

「ん」

「……わーったわーった、今日だけな」

「やったにや」

「なんか、騙された気がする……」

「気のせいじゃ」

「はいはい…もう寝ようぜ」

「うんっ」

数分後

「…ったく、ものの数分で寝ちまったな…疲れてるんなら、先に寝ちまえばいいのに…」

「すー…すー…」

「…そーいや、昔こついう昔話を婆ちゃんから聞いたよつな…ペットが人になって…それから…どうなるんだつたかな。ま、昔話だからペットなんて言い方じゃなかったんだろつけどな」

「すー…すー…」

「あー、覚えてねえな。…それにしても、今日は俺も疲れた…つたく、とんだハプニングだ」

「ご主人…好きだにゃ…すー…すー…」

「……………ま、悪いことばかりでもないかな」

## 一日目（後書き）

どうでしょう？

会話文だけだと、大体こんな感じですよ。

アドバイス等ありましたら、コメントとしてどうぞ。

また、状況を呑み込めなかった方も、質問などあれば気軽にどうぞ。  
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

『一日目』をいつ書くかは知りません（爆）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4213z/>

---

愛猫が人になっていた時の話。

2011年12月14日17時53分発行